東方巨漢紀行

門倉鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方巨漢紀行

【Nコード】
N0397N

【作者名】
門倉鐘

【あらすじ】
世界紀行を書きながら旅する2メートル超えの巨漢ジョージ・サンランド。日本に訪れた彼を待っていたのは、喫茶店を出たら山中に置き去りにされるという非現実的な現実だった。30代妻子持ちのおっさんとうら若き（?）少女たちが織りなすロマン紀行。

00. 山中にて

木々が生い茂る山奥で、2メートルを超える巨躯を持つ大男、ジョージ・サンランドは途方に暮れていた。

既に日はその半身までを沈ませて、頭上の空は朱から黒へと様相を変えつつある。

(うーむ、参った)

規格外に大きく無骨な造りの顔を歪ませながら、誰に聞かせるでもなく困った困ったと心中でつぶやく。

旅に出てから早五年、無鉄砲な彼が山で遭難したのはこれが初めてというわけではないが、今回ばかりは勝手が違う。

なにせ喫茶店にいたはずが、会計を済ませて一歩外に踏み出したと思ったら山の中にいたのだから。

しばし呆然としてから慌てて振り返ったが、つい先程まで「またお越しくださいませ」と言っていた店は跡形もなく、鬱蒼とした森が壁のように立ちふさがっていた。

わけがわからず混乱しながらも、第一に行動することを信条にするジョージはとにかく周囲を調査することにしたのだ。

その結果わかったことといえば――

1. 下手な手品でも何でもなく、本当に山の中にいるらしいこと
2. 今いる国は時計と太陽の位置からして、先程までいた日本らしいこと
3. それにしては見たことのない植物が目につくこと
4. 荷物(彼の体格に合わせた特別製のダッフルバッグと中身)はすべて無事だということ

5．最後に、とてつもなく嫌な予感がすること――

ということでいつまでも一所に止まっているのは危険だと判断したところまではいいのだが、問題はどちらに行けば麓なのかがさっぱりわからない点である。

下手に動けば更に奥地で迷う可能性がある、かといって得体の知れない場所で一夜をしのぐのも危険だ。

サバイバルの知識は十分にあるが、いかんせん日本に到着したばかりだったので、テントや水筒はともかくナイフの類は一切持っていない。

そんなわけで彼は唸りながら今後の行動方針を決めあぐねているのだった。

(……わずかな携帯食以外に食物はなし。武器になるようなものもペンと硬貨くらいか)

そもそも何故こんなことになったのだとか、一体自分に何が起こったのだとかはまったく気にしていない。

どうせ考えてもわからないことの思索を直感的に放棄するのは経験であり性分だ。

そんな彼が最終的に選択した行動は、いつもと同じ。

(結局考えても始まらん。まずは行動しなければ)

一見無謀でも、とにかく動き始めることだった。

暗がりが広がっていく山中を一つの巨大な人影が闇雲に、木々を薙ぎ倒さんとする勢いで駆けて行く。

傷痕だらけの巖のような顔、はち切れんばかりに盛り上がった筋肉、丸太を思わせる太さの四肢に節くれだった手。

短く切り揃えられた金髪は闇に輝き、その合間に覗く蒼い瞳は氷のように冷たい。
子供一人をすっぽり覆うような雑嚢を背負い、その巨躯全身を黒のコートで包んだ姿はまるで怪物だ。
ただ一つ――戸惑ったような、あせっているような、微妙に泣きそうな表情が妙な愛嬌を見せていた。

０１．熊と烏の遭遇

烏天狗・射命丸文の朝は早い。
清く、正しくを自負する彼女は、自身が一から作る「文々。新聞」の発行にも妥協を許さない。
記者の誇りとして、自らの目で確かめた真実以外を記事にすることはないし、その真実を大衆が望む客観的な真実として捉えることも違えたことは、ない。
かといって一つ一つのネタに時間をかけるわけにはいかない。
情報とは鮮度が命。
真実の追求は生き甲斐であるし、調査をおろそかにしていい加減なことを記事にするわけにはいかない。
だが、のろま扱いされることだけは幻想郷最速の看板を背負う者として許容できない侮辱だ。
故に射命丸文は新鮮なネタを求めて、日の明けないうちから空を飛び回るのだ。

それはジョージ・サンランドにとって幸運だったかもしれないし、もしかしたら不運だったかもしれない。
ネタを見逃すまいと高高度から地上を見渡し、ゴシップに対する鋭い嗅覚と勘を持つ彼女が、薄暗い木々の合間を疲れたようにのしのしと歩く巨躯を発見するのに、大した時間はかからなかった。

ジョージ・サンランドはその体格と同じように、少しばかり特殊な経歴を持っている。
子供の頃から異様に体が大きく、同年代の子たちと並べると頭二個分は抜きん出ていた。

幼心にもその長身は異様で、周囲に馴染めず友達も非常に少なかったせいか、彼はいつしか妙な臆病さを見せるようになった。
そんな彼が成長し、大学に入らず就いた仕事は、意外なことに警察官だった。
ジョージなりに自分の並外れて恵まれた肉体と体力を活かす道を考えた結果だったが、案外うまくいってそれなりに活躍と信頼を得た。
それまで邪魔者扱いされることが多かった彼にとって、誰かに認められる喜びは途方もなく大きかった。
相変わらず巨体を邪魔だと言われることもあったが、それは冗談混じりの親愛に取って代わるようになっていた。
転機は警察官になってから五年目、２４歳の春に訪れた。

「あややややややや。熊かと思ったら人でしたか」
一晩中山を走り続け、軽く走馬灯を見る程疲労困憊していたジョージは、突然聞こえてきた少女らしき声の主を探し、ぼんやりと周囲を見渡した。
しかし目に入るのは半日前から変わらず木々でできた壁のみ。
とうとう幻聴まで始まったか、本格的にやばいな、というか自分がここまで消耗するとはやはりこの山おかしい、などと思っていると再び可愛らしい声が響いてきた。
「下ではなく上です上。あ、スカートの中は覗かないで下さいね」
先程よりも近い場所から聞こえる声に上、と言われ目線を緩慢に上げていくと、黒髪の少女が翼を広げながら舞い降りてくる姿が見

えた。

「……」

あ、お迎えだ。

急に力が失われていく体に抗いぐっと踏みとどまると、ぼんやりとしながらも少女に対して警戒態勢を取る。

喫茶店を一歩出たら山に放り出されていた、という非現実を味わったジョージだが、目の前でふわりと着地する翼を生やした少女はあまりに生々しい非現実だ。

わけのわからない現象には手の出しようがないが、こうした目に見える不条理にならば対応することもできる。

ジョージがわずかに身構えると、その微かな緊張を察知したのか、高下駄をかつりと鳴らした少女は執り成すように微笑を浮かべた。

「これは失敬。まだ名乗っていませんでしたね。私、烏天狗の射命丸文と申します」

そう名乗った少女の言葉に、ジョージは訝しげに眉をひそめる。彼は違和感を覚えたが故の反応だったのだが、射命丸文は勘違いして更に弁解のような自己紹介を続けだした。

「あやや、決して怪しい者ではありません。私こう見えて記者でして、こういう新聞を発行しております」

えーと、と言いながら鞄の中を探り何枚かの紙の束を一まとめにした物を取り出した。

いくらか緩めたものの警戒を解いていないジョージは、手渡された紙面に目を通し、今度こそ愕然とした。

先程からあった違和感は最高潮に達し、困惑に支配されながら絞り出すようにその文字を口に出す。

「……ぶんぶん、しんぶん……？」

「いえ、ぶんぶんまる、です」

文の言葉は彼の耳には届いていない。
いや、正確には届いているがそんな些末なことよりも重大な問題が発生したため、気にする余裕がないのが現状だ。
紙面を舐めるように見て、一文字一文字を凝視するジョージの姿に鬼気としたものを感じ、文は口をつぐんだ。
地面に並び立つと、高下駄を含めてもあまりにも身長差があるため思い切り見上げる格好になる。
普段はネタのためなら物怖じしない文だが、眼前に立つ大男が黙りこみ盛大に顔をしかめながら自分が書いた記事を読む様を目の当たりにすると、何やら居心地が悪くなってくる。
短く切り揃えられた髪や冷たい色の瞳は、獲物を狙う鷹を思わせる。
何より熊と誤認した巨躯には分厚い漆黒のコートを着込み、無骨な顔には数える程だが傷痕があるのだ。
客観的に見てとても怖い。
そう思い始めた矢先に大男が空気を唸らせながら急に顔を向けてきたものだから、さしもの文も「ひっ！？」という情けない声を挙げてしまった。

「な、何ですか！？」

「なあ、君は日本人なのか？」

「は？　い、いえ、烏天狗です」
「いやそうでなく。ここは日本なのか？」
しかしどうやら大男の方がよほど切羽詰まったようだったので、文は次第に落ち着きを取り戻していった。
「はあ。ここは幻想郷ですが、どこにあるかと訊かれたら、日本だと言えるかもしれません」
答えを聞くとジョージは例によって妙に愛嬌のある困った顔をしながら、手にした文々。新聞を指さした。
正しくはその文字を。
「これは日本語だな？」
「え、えーと？　そうですよ？」
「私たちは今、日本語で会話しているか？」
「はい？」
まるでジョージにつられるように文も困惑顔になる。
それを見たジョージは得心しながらも、余計にわけがわからなくなったような複雑な目をしながら説明した。
「落ち着いて聞いてくれ。実は私は大体なら理解できるが、日本語を話せないし、ましてや文字を読むなんて不可能なはずなんだ。無理なんだ！」

文の肩を掴みながら、言い聞かせようと圧倒的な体格差でその体を揺さぶる。

声も出ないほどシェイクされながら、急速にぶれる視界の中、文は思った。

(まずあんたが落ち着け)

詳しい話し合いがなされたのは、軽くダウンしてしまった文が回復してからのことだった。

02. ジョージの理解

「本当にすまなかった。私も気が動転していたようだ」
「いえいえ。もう大丈夫ですから、あまりかしこまらないで下さい」
——あれから。
腕の中の少女が目を回していることに気付いた大男はパニックから正気に返り、少女は簡単な介抱の末に思ったより早く復活した。元々、平常時から疾風よりも速く空を飛び回る幻想郷最速の天狗である。
狂った平衡感覚を取り戻すことに苦はなかった。
確かに驚きはしたが、そういった面で文はジョージに対して怒りを覚えたりしたわけではない。
しかし一方のジョージからすれば、いい年して勝手に恐慌を来した挙句、まだ若い女の子を脳震盪になるまで振り回してしまったことになる。
とてもではないが弁解できたものではない。
結果として恐ろしい熊のような大男が華奢な少女に平謝りするという奇妙な構図ができあがっていた。

話が進まないので困った顔をした文は、空気を切り換えるために高下駄をカツ、と鳴らした。
同時にばさりと翼を打ってジョージに意識を向けさせる。
「介抱して頂きましたし本当に大丈夫です。それより、詳しいお話を聞きたいので名前を教えてもらえませんか？」

「すまなかった。そう言ってくれると助かるよ」

どう見ても十代半ばくらいの少女の理知的な対応に、内心微かな疑問を抱きながらも、とりあえずはとても聡明なのだろうという判断を下しつつジョージは答えた。

「私はジョージ・サンランドという。国籍はアメリカだ。君は確かアヤだったな」

「はい。えーとまずはそちらのお話を聞かせてもらっていいでしょうか。疑問には答えますので」

言いつつ笑みを浮かべ、再びかつりと高下駄を弾く。

「それと、もう少し砕けて下さると私も気が楽です」

堅苦しいの苦手なので、と言って文は笑う。

見た目相応に可愛らしい姿に、ついジョージも弛んだ笑みを見せた。

ずっと溜め込んでいた緊張を捨てるように大きく息を吐き出すと、いつのまにか疲れを忘れていることに気付く。

湧いてきた活力を頼りに文を見据え、生来の人の良さそうな砕けた表情になると、自然に空気も和やかになっていく。

突然愛嬌満点な愛玩用の態になったようなジョージに目を見張りながらも、文はこの大男が自分に気を許したことを悟った。

「そんじゃあ、私の理解できる範囲でことの次第を話そうかね」

「私の仕事は旅しながら紀行文を書くことでね、まあ趣味みたいなものなんだが、とりあえずは世界紀行の本を目標にしている」

「ほう！　書いてるものは違いますがシンパシーを感じますね」

「ああ、お前さんは新聞記者だったか」

立ち話もなんなので、木の下にジョージがダッフルバッグから出したレジャーシートを敷き、二人並んで座りこんでいる。

和やかに語るジョージと目を輝かせながら話を聞く文は、端から見るとまるで親子のようだった。

もちろん文はせわしくメモを取ることは忘れない。

「異国の方とお見受けしますが、日本へは仕事で？」

「他のところは大体書き終わってたからなあ。そんなわけで飛んできたのはいいんだが……」

「む、失礼。異国の方は飛べるんですか？　今までの外来人で飛べる方はいなかったのですが」

座りながらもぱさりぱさりと翼を揺らす。

外来人、またわからない単語が出てきたぞ、旅行者のことじゃあなさそうだが、と思いながらも話が長くなりそうなので今は置いておく。

同時に、飛行機のことも知らなさそうなので軽く触れておく。

自分が非常識的な体験をしているらしいこと、常識が通じそうにないことは既に察知しているのだ。

「お前さんみたいに翼でもあれば楽だったんだがな。自力で飛べな

い奴らは空飛ぶ乗り物を作ったのさ」
簡潔に説明すれば文はふむふむと頷きながらペンを動かす。
しばらく夢中になっていた文だが、ジョージが自分が書き終えるのを待っていることに気付くと照れ臭そうに先を促した。
「……まあ、それで、日本にやって来たまではいいんだ。問題はここからでな」
正直自分自身わけわからないんだが、と前置きする。
「喫茶店で一服して店を出たら、一瞬でこの山にいたんだよ。確かに街中にいたはずなんだがな」
ジョージが理解できている状況は本当にここまでだ。
後は混乱しながらも動いた方がいいと判断し、結局徒労に終わりかけたところを文に発見されたのである。
これで説明になるとは思っていなかったが、彼の予想に反し天狗の少女は得心したように頷いていた。
「ジョージさんが何故ここにいるのか、それについては私に心当たりがあります。ですが後できちんと説明するので、次に日本語がどうこうについて説明して頂けますか」
ジョージが取り乱すきっかけになった文々。新聞を取り出しひらひら揺する。
それを見たジョージは若干苦い顔ながらも、一番気になっていたことだったので首をかしげ、続けて語り始めた。
「世界を旅すると言ったが、私ぁ意思は体と心で伝えられると思う

口でね」
「つまり言葉を予習しないでぶっつけ本番、ということですか」
「まあそういうこったな。実際、大抵のことはそれで済んだからなあ」
文は手にしたペンをくるりと回すと持ち手をジョージに向けた。インタビュアーのマイクのように、座ってなお高い位置にある口元へそれを突きつける。
「でも、随分とお達者な日本語ですよね？」
「正にそこだ」
分厚い手のひらで突き出されたペンをやんわりと押し返す。文はもう一度ペンを半回転させて、今度はヘッドを弄りだした。
「あの時も言ったようにな、相手が何を言いたいのかは大体わかるんだが、日本語そのまんまで会話したり文字を読むことなんて私にゃできないはずなんだよ」
日本語はやたら難しかったからな、と笑う。
「それがどういうわけかお前さんと話せたし、新聞なんてものまで読めた。こりゃあわてふためくってもんだ。自分にない知識が当たり前のように使えたんだからな」
なんでこの男は困り顔になると可愛く見えるのだろうか、などと文は思いつつ、大きな顔の前に二本の指を立てた。

ごつごつとした顔がきょとんとした色を浮かべる。

（うわ、このおっさんかわいい）

気持ちを正したかったが、高下駄を鳴らしにくい姿勢なので、咳を一つすることでそれに代える。

「それについても、二つばかり心当たりがあるんです。……では、今からジョージさんが置かれた状況を説明しますので、足りないところは質問して下さい。その後はちょっと取材に協力してもらいますよ」

「ああ、頼む」

ジョージから了承を得た文は微笑むと、ペンをしまいメモ帳を閉じた。

空を見れば既に白み始めているようだった。

そろそろ白狼天狗たちが哨戒任務に就く頃だろう。

こんな早朝から人間が妖怪の山にいることが知れたら、少し面倒なことになるかもしれない。

「では、まずこの地――幻想郷について説明します。そうですね、長くなるので歩きながら話しませんか？」

再びジョージが了承すると、二人は立ち上がり文の先導のもと、白狼天狗に認識される前に下山を始めるのだった。

０３．悪夢の終始

小鳥がさえずる山中を二つの人影が並んで歩いている。
木々の合間から朝日の光が差し込み、二人は素顔を順に照らされる。
前を歩くのは黒い翼を生やした黒髪の少女、射命丸文だ。
年の頃は１５歳前後といったところだが、妖怪・烏天狗である彼女には人間の道理は通じない。
高下駄を弾いて歩き、人差し指を立てて何かを説明しながら時折振り向く姿は明るく楽しげだ。
少女に続くのは、彼女と対照的に「そびえ立つ」という表現がふさわしい偉丈夫だ。
肩から提げている雑嚢だけでも彼の前を歩く文ほどの大きさがある。
ひどく恐ろしげな風貌の男ではあったが、それにそぐわぬ朗らかな表情がジョージ・サンランドたる証であった。
芭蕉扇のような大きい手で、爪楊枝のようにペンを握り、メモに意外に几帳面そうな細やかな字を書いていく。
意識は手元に向け、文の言葉に相づちを打ちながらぴったりと寄り添って付いていく様は、どこか従者じみていた。

やがてジョージは目を文に向けると、彼女から聞いた幻想郷についての話をまとめ、その確認を始めた。
「つまり、この幻想郷ってのは『私らの世界でその存在を忘れられたもの』が辿り着いて暮らす場所なわけだ」
「そうです」

「で、そんな場所だから妖怪——日本や中国に伝わるモンスターだったか——が存在し、お前さんもそのお仲間である、と。烏天狗はどういう妖怪なんだ？　翼が生えてるのはわかるんだがなぁ」

応えて黒い翼が数回羽ばたく。

ひらり、と落ちた一枚の羽をジョージが拾うと、どこか拗ねた口調で文が答えた。

「まさか天狗を知らないとは。鬼や河童に並んで有名だという自信はあるんですけどねー」

そう言ったところで妖怪に詳しくもないジョージが知っているはずもない。

「まあいいです。天狗というのは、簡単に言えば山に住む超常的な力を持った存在でして、その中でも私のようにカラスの特徴を持ったものを烏天狗といいます。他には犬……じゃなくて狼の特徴を持っている白狼天狗がいますよ」

振り向いて、両手を狼の耳に見立ててぴこぴこと動かす。

あどけない仕草にジョージが顔を弛めると、文もつられて微笑んだ。

「あ、それと天狗はお酒に強いんです。私も結構いける口ですよ？」

挑戦的な笑みをぶつけた文だったが、その言葉にジョージは渋面を返した。

困り顔の時とは違い、歪められた顔は随分と怪物じみていた。

「酒って、おい。お前さんまだ呑むような年じゃないだろう。私が言えたことじゃないし、実際若いうちから呑むことを悪いなんて言う野暮はしないが、大人の前で大っぴらに吹聴するもんでもない」

唐突なホラーに内心驚き怯え、妖怪としての矜持が地味に傷ついていた文は、見当違いな説教にまた拗ねながら返事をした。

「私も乙女なので多くは語りませんけど、少なくともお酒を飲むくらいわけない年齢なんですよ。その忠告自体が野暮ってもんですー」

とがらせたくちばしに微笑ましいものを感じながら、ジョージは驚きつつも納得する自分を見つけていた。

文の言動の端々に感じていた違和感の正体を探り当てた気分だった。

「そりゃ、悪かったな。――じゃ、そろそろお前さんの心当たりってやつを話してもらえるかい？　私が辿り着いちまった理由と、何故か通じる言葉について」

「そろそろ出口ですし、そうですね。どっちも私の推測になりますけど……」

「はなから私にわかってることなんざないんだ。構わないさ」

「では私見ですが僭越ながら。まず、ジョージさんがこちらに来てしまったのはスキマによる犯行だと思われます」

てっきり不思議ではあるが不幸な事故だろうと予測していたジョージは、犯行、という言い回しに不吉な悪感を覚えた。

「陰謀者（スキーマー）だと？　じゃあ何か、あのわけわからん瞬間移動は誰かさんの仕業なのか」

（スキーマー？）

妙な響きに若干の疑問を浮かべながらも、下手人の胡散臭さを思い出すと、そんなささやかな違和感は消えていった。
文自身とぼけながらも胡散臭い自覚はあるが、あのスキマの使い手に比べれば遥かに霞む胡散臭さだ。
天狗らしく傲慢な面もあるが、流石にあそこまで人を欺いているつもりはない。

「その名をスキマ妖怪・八雲紫といいます。彼女の能力は境界を操るものでして、空間と空間をつなげることが可能です」
ジョージは喫茶店から足を踏み出した瞬間を思い出していた。
空間と空間をつなげるとは実感がわかないが、そんなことができるならば犯人である可能性はある。

「だが確証がないんじゃないか？」
冤罪で責めてしまうのは申し訳ないので、そうでない可能性も提示する。
誠に理性的な対応だ。

「常習犯ですし、多分悪びれたこともないですよ？　今までスキマで神隠しに遭った人は百を下らないはずです」

「ああ。じゃあしょうがないなあ」

今回の件に関して、万が一冤罪だったとしても。

「とりあえず山に放り出された件については、八雲紫が黒でほぼ間違いないと思います」

「ふむ」

「次に言葉の件ですが、可能性が高いのは、やはり八雲紫です」

「…………」

「ジョージさんの言葉が通じないことを見越して、言語の境界を弄ったかもしれません」

流石に、本当に八雲紫が犯人なのか疑問が生じる。

(なんか、体よく黒幕扱いされてるんじゃあないか？)

幼い頃、異様な図体で仲間外れにされ、何かあると密かに疑われていた過去を持つジョージからすれば、あまり他人事とは思えない。ジョージの複雑な心情に気付くことなく、文はもう一つの心当たりを告げた。

「もう一つは、それがジョージさんの能力である可能性です」

「ん？　なんだって？」

能力。

確かにおかしな巨体をしてはいるが、別に妖怪になった覚えはなかった。

そう答えると、それは違うのだと文は言う。

「能力は、人間だろうと外来人だろうと、異国の方だろうと誰もが発現する可能性があります」

その強弱に関わらず、という言葉と同時に強い風が吹き、周囲の木の葉がざわめいていく。

風は文を中心に集まると、更に強く吹き荒びながら去っていった。

「私は烏天狗で、幻想郷最速の看板を背負い、風を操る程度の能力を持っています。能力は種族や生き方に影響されることが多いですし、その逆もまた然りです」

今度は柔らかな風が流れ、ジョージの頬を撫でて空気へと溶けた。

「ジョージさんは世界を旅して本を書いているとのことでしたから、言葉や文字に対する思い入れが能力になったのかもしれません。なんとなく自覚はありませんか？」

言われて目を閉じ胸の内を探ってみると、ぼんやりとした感触があった。

だが、それが何なのかまでは捉えきれない。

果たして能力なのかどうかすらわからない感覚だったが、それが自分の物であるという認識だけははっきりとあった。

それこそ、今身にまとっているオーダーメイドの旅装束と同じく不思議と馴染む感触だった。

「あや、ぼんやりしているならまだ発現しきっていないか、的外れなイメージをさせてしまったのかもしれませんね。と、もったいぶっておいてなんですが、以上が私の心当たりです」

確かに彼女が初めに宣言した通り推測ではあったが、右も左もわからないジョージにしてみれば十分に価値のある情報だった。
そうこうしているうちに周囲の様子が少し変わった。
鬱蒼としていた木々はだんだんとまばらになり、ジョージの体は完全に本調子を取り戻していった。
どうやら、ある程度は妖気の影響を受けていたらしい。
それが弱まっていくということは、すぐそこが妖怪の山の出口だということを示していた。
「どうやら、やっとこさ出口かな？」
疲れた溜め息を吐くと、いたわりの笑みと共にカツと響く高下駄の音。
「お疲れ様でした。ここが妖怪の山の出口になります」
「本当に助かった。お前さんに出会わなけりゃ、あのまま森の人にでもなっていたかもな」
「その時は歓迎しますよ。さて、ついでですから人里までご案内しますね」
「重ねて助かるが、いいのかい？」
「もちろん。ですが、お約束通り――」
にやり、と笑いながらペンとメモ帳を取り出し構えを見せる。
今までになく高くカッと鳴り響く高下駄と、軽く二人の髪を揺ら

すほど大きく羽ばたく翼があった。

「――取材にご協力をお願いします！」

気を抜くのは早かったようだと、今更ながらジョージは悟るのであった。

04．アルフとジオ：1

警察官となって迎えた24歳の春、ジョージ・サンランドはある人物の来訪に際し、その警備に就いていた。
その人物の名はアルフレッド・ウェセックス。
英国に本社を置く大企業・ウェセックスカンパニーの創立者である。
扱う事業はリーフに始まりティーカップに終わる、紅茶という限定された世界に収まっているのでそれほど無闇な成長が起こった会社ではない。
だが、安価なものから高価なものまでニーズに応えつつ揃え、いずれも一級の品質を保証し続けたウェセックスというブランドが庶民に限らず上流階級にも愛されるようになるまでさほどの時間は必要なかった。
自然、アルフレッドが趣味の範疇で始めたこの会社はみるみる成長し、今では彼の手を離れて信頼できる社長のもと順調な経営を見せていた。
というのも、会長であるアルフレッドはウェセックスカンパニーの前身・『アルフ老の紅茶畑』創立当時、既に70歳を目前にした老体だったので、あまりにも大きくなった会社の運営は手に余ったのであった。
妻とは若くして死に別れ、一人息子にも子を遺さずに先立たれたアルフレッドが孤独を紛らわせるために興した会社は、隠居した老紳士に今更ながらの富を与えるのだった。
――そんな彼に残された一番の趣味は、世界中を旅行することだった。
普段の生活の中では見ることの出来ない壮大な風景や歴史を刻ま

れた荘厳な殿堂、旅先で触れ合う人々との日々は老人の孤独を癒してくれた。
そんなアルフレッドだったので――彼は大企業の会長ということもあり、それなりに大事な体の持ち主だったが――社員たちの心配をよそに、旅行中はボディーガードをつける必要があったのだが、それを頑なに拒んだ。
アルフレッドに言わせれば「旅の連れがビジネスライクなボディーガードなど、無粋以外の何物でもない」とのことだったが、この言葉に社長を始め社の面々は頭を抱えることになった。
結局、ウェセックスカンパニーはアルフレッドの旅先の地元警察機構に、会長の観光中はそれとなく警備を強化して欲しいという『お願い』をすることで一時落ち着いた。
もちろん本音では信頼の置けるボディーガードを同行させたかったが、アルフレッドに少なからず恩義のあるウェセックスカンパニー幹部たちは、孤独なアルフ老の境遇も相まって強く出ることができないのだった。
そして大企業のわがまま会長の気楽な一人旅は続き、幸いなことに事件の類に巻き込まれたり標的になることはないまま、８１歳の春を迎えた。

――そうしてジョージとアルフレッド、後にお互い「ジオ」「爺さん」と呼び合うこととなる二人は出会うのだった。

「若いの、随分立派な身体しとるの」

「はあ」

その日、上から下された警備強化の命令にいい加減な対応をする

同僚とは違い、生真面目に二割増しな光を眼に宿したジョージは老紳士に話しかけられていた。
すぐ近くにいた同僚は普段よりも更に厳つい雰囲気のジョージに気安げな言葉をかけた老紳士を驚嘆する面持ちで見つめた。
気安げな、とはいっても上品な声に気品ある佇まいから、この老紳士が今回の警備強化の原因となった噂のウェセックス会長だろうと判断し、噂好きな彼は口を挟まずにいた。
アルフレッドは自分を見てにわかに緊張した警官を意に介せず、目の前のどこか抜けた感じのした——良く言えば温厚そうな——巨人をまじまじと見上げる。

「仕事熱心なのは構わんが、こんな平和そうな公園でそこまで目を光らせることはないのだろう」

それも子供たちが遊んでいる姿が見える自然公園の噴水前である。何故こんなところに二人の警官がいるのか、その理由は織り込み済みだ。

「いえ、まあ、警備を強化するように上から言われてますので」

馬鹿正直に答えるところがジョージらしいと同僚は思った。
続いた、子供がいるところを強化すべきだと思った、という言葉に更にその念が深まる。
お人好しだと思ったのは彼だけではないらしく、老紳士もまた目元を緩ませたが、すぐに苦い顔をした。

「だが肝心の子供たちが怖がっては意味ないだろう」

「えっ」

ジョージが慌てて不審者ではなく子供たちにピントを合わせると、確かに彼らは何かに怖がっているようだった。
いや、その「何か」が剣呑な目をしたジョージだったことにはすぐ気付いた。
今でこそジョージの人柄に触れ彼になついてくれた子供たちだが、この怖がり方は着任当初の「サンランドの怪物」を見た様子に酷似している。
その名を広めた当の同僚は、突然眉尻が情けなく垂れた「怪物」を見て吹き出した。
警戒する警官からひとりぼっちに怯える態にクラスチェンジした男は精一杯の声をあげた。
「おぉーうい、みんなぁ、私ゃあ怖くないぞぉー！」
岩をも砕けそうな歯を見せ笑いながら、張るだけで人を殺せそうな大きな手を振り、まるで大砲が喋っているような大音量で声を出す。
今やったら逆効果だ、と思う間もなく蜘蛛の子を散らして少年少女は逃げていった。

「…………」

「……ぶふっ」

「……くっ」

ジョージが唖然としていると、傍らの二人は堪えきれなかった笑いを零した。
片方に至っては笑い声の合間に「馬鹿でー！」だの「腹いてー！」だの、遠慮のない言葉が紛れ込んでいる。

しょんぼりとうなだれた熊へと先に声をかけたのは老紳士だった。
本来ならまず慰めてくれるはずの同僚は「流石はサンランドの怪物だ！」と何が面白いのか、とうとう爆笑しだしていた。

「災難だったの」

老紳士はどこかおかしそうではあるが、笑いの余韻が抜け切った声音で宥めるように肩を叩いた。
手を置くにも難儀しそうな身長差は、ジョージががっくりと肩を落とすことで補われていた。

「……ああ。ありがとうな、爺さん」

「なに。元はと言えば、私が指摘しなければ済んだ話よ。すまなかったな」

「そんなことはないさ。——いつまで笑ってるビクター」

「ははっ！　お前こそいつまで怖がられてんだよ。……ああ！　子供は次々生まれるから、ずっとか！」

小さな時に鏡怖くなかったのか、と吹き出しながら訊く同僚はかなり鬱陶しく、ジョージのみならずアルフレッドも渋い顔をした。
お互いに目が合って苦笑する。

「お前さんも苦労しとるんだな」

「こんなガタイだから、昔からな」

「そうか。……私はアルフレッド・ウェセックス。ただの旅好きな

老人だ」
「私はジョージ・サンランド。図体ばかりでかい警官だ」
「ふむ」
アルフレッドは思い出したようにじろじろとジョージに観察の目を向ける。
やがて満足そうに頷くと、悪戯な笑みを浮かべ高い位置にある目を見た。
「時にジョージ」
「なんだ？」
「旅は好きかな？」
「……まあ嫌いじゃないが」
意図するところをつかめず首を傾げたジョージに、アルフレッドは笑みを深め、そして言った。
「決めた。お前さん、警察辞めて私のボディーガードになれ」
「ああ。…………ん？　えっ？」
こうしてこの日、ジョージは人生の転機を迎え、アルフレッドは人生最後の伴侶を得たのだった。
蛇足ではあるが、会話を聞いていた同僚が「ラブロマンスか！？」と叫ぶ様は、やはり鬱陶しかった。

「ここでまさかのラブロマンスですか！？」

ジョージはいつかの誰かと同じように叫ぶ文を見て、げんなりした顔で彼女を睨んだ。

ペンをきつく握りしめ、メモ帳にガリガリと書く記者スタイルの文は、ジョージからすればいくらか控えめに見てもパパラッチの勢いだ。

もしもここで面倒臭くなり首を縦に振ったが最後、ジョージのことについて書かれた記事にはまことしやかに同性愛好者だと記されるのだろう。

まだ話してはいないが、文曰く「外」の世界に妻と子を持つ身としては、戯れでも変な疑惑を吹聴されては困るのだ。

ジョージは即座に間違いを正すことにした。

「そんなわけないだろう。爺さんとは確かに二人旅をしたが、あくまで雇い主……いや、むしろ父親のように思っていたからな」

「えー、それじゃつまら、じゃなくてですね、そりゃあそんな非生産的なことするわけないですよね。――で実際のところは？」

巨体から本気で憤慨するような空気が発せられ、危うく取り繕う。

「ややっ、もちろん冗談です！」

文としても事実は予測した上での、冗談半分の戯言だったので無

用な怒りを招いたことに反省した。
……あくまで、冗談が半分である。
「えー。ところで、そんなお話が聞けたのは嬉しいのですが、何故服の話からそのアルフレッドさんが出てきたんですか？」
ジョージの体躯を包む巨大な衣服を指差し、そもそもの質問を思い出させると彼の意識が衣服に移る。
文は内心で冷や汗をかきながら小さくガッツポーズを取った。
それはともかくとして、文が取材と称して最初に訊ねたことは確かに、明らかにオーダーメイドだとわかる彼のコートのことだった。
コートは大きめな物が多いが、彼のコートは巨大な体格に合わせた上での「大きめ」なのだ。
更によく見ればコートのあちらこちらにポケットやベルトが付き、それを持って装飾にしている、持ち主同様の無骨さだ。
オーダーメイドでないはずがない。
「そういやそうだったなあ。口下手ですまんね」
恐ろしくも愛らしい困り顔で頬を掻く姿は、やはり熊のようだった。
「つまるところだな、アルフ爺さんがあつらえてくれたんだなあ、このコート」
言いつつコートを脱ぐとその下からは、締まった筋肉を押さえ込んでいるやはり分厚そうなアンダーシャツと、コート同様にポケットとベルトで機能的かつ頑丈に装飾されたズボンが現れた。
ジョージがコートの裏を見せるとそちらにもポケットやベルトがあり、二本のペンライトがベルトで留められていた。

「このシャツやズボンもそうだし、こいつとこいつもそうだ」
こいつとこいつ、と指で示したのは靴と、コートを脱ぐため足下に置いた雑嚢――ダッフルバッグだ。
靴はズボンの裾を上げることでわかったが、荒れた山を駆け回れそうなほど頑丈そうな長めの編み上げ靴で、外側にはナイフを収納するための小さなベルトと専用の留め具が付いている。
一方のダッフルバッグは内にも外にも収納スペースが確保され、その巨大さに見合う頑強さが保証されていた。
肩に背負っていた時には見えなかったが、紐で縛られた口の辺りにはＡｆＧという刺繍が施されている。
ジョージが中に手を入れ探り出すと、今までと同じ意匠の、これまた丈夫であろう革の手袋が握られていた。
共通した意匠のそれらは全て黒かそれに近い濃緑で統一されていて、いかにも重厚なジョージには重すぎる気もするがよく似合っていた。
次々と出てきた重苦しい装備品（もはや装備という表現が相応しかった）の数々に文は目を丸めると、次にジョージをまじまじと見つめた。
「これは……全部アルフレッドさんから頂いた物ですか」
「身に付ける物は、そうだなあ、全部だな」
ダッフルバッグからは何着か同じシャツや靴下、下着が出てきたが、それらにはどこかに必ず金の刺繍でＡｆＧの三文字が印されていた。
「Ａｌｆｒｅｄ　ｆｏｒ　Ｇｅｏｒｇｅか。まあ餞別ってやつだろ

うな。これで一応、形見だ」
――形見。
その言葉が自ずと示すのは、つまり、そういうことだろう。
文が先程途中まで聞いたジョージとアルフレッドの話では、どうやらアルフレッドという孤独な老人はジョージを旅の連れに定めたらしい。
旅好きだったという彼が、いかにも旅のために用意したような品々を形見として人生最後の伴侶に贈ったのは、一体どういう心持ちだっただろうか。
そして――。

「……もしや、ジョージさんが世界紀行を書いていらっしゃるのは」
「まさか。いや、もしかしたらそうなのかもしれんが、私は自分のためだと思ってるよ。まあ、旅好きなのは爺さんの影響だがね。それにほら、折角の貰い物なんだから使わなきゃあ、もったいないじゃないか」

ジョージは口ではそう言いながらも、どこか遠いところを見ている眼をしていて、文はそれ以上追求することを止めた。
何より、この件に関して問い質すことは、何故だかこの大きくも穏やかな男を追いつめているような気分になるのだった。

かつり、と鳴った高下駄の音に、意識をどこかに追いやっていたジョージはハッとした。
隣に目を向け、目線をぐっと下げればそこには天狗の少女がいる。

「ところで」

鈴を転がす声を紡ぐ少女を見て、そういえば彼女はカラスだったかと思い出し、微かな疑惑に至った。

それは間違いで、実はウグイスなのではなかろうか、と何となく思う。

だが、次の瞬間に脱力した。

「男性の一人旅って、やはり色里とか利用するんでしょうか」

「あ、はあ!?」

「いや、乙女としては実際気になる話です!」

間違いなくカラスだった、この少女は。

もちろん、それが彼女なりに気を使った結果だとはわかっていたが。

だがよりにもよって、あまりにも下直球な話題が飛ぶとは予測できなかった。

「待て待て。お前さん、いい年した娘が言うようなことじゃないだろう」

「はっ! 女に対して幻想を抱きすぎですよ」

「いや、それ以前に私にゃあ妻も子もいるんだ。変なことは……」

「あやや、奥さんに子供さん! 是非とも色々と赤裸々に語って頂きましょう! そもそも記事にできるようなお話あまり聞いてない

ですよ、まだ！」
「ええ、そんな、今までさんざ話したことは」
「人々が求めているのは熱く愉快で時に恥ずかしい、そんな醜聞、もとい真実です」
「そりゃあ、要するにスキャンダルじゃあないか！？」

先程までとは対照的に、ぎゃあぎゃあ喚きながら歩く二人を、南に高く昇った太陽が照らしている。
歩く先には人間が生きている証である家々が建ち並び、今も人々で賑わいを見せている人里がある。
遠くに見えるその影は少しずつ大きさを増していき、騒ぐ二人の到着を告げようとしていた。

０５．人里への道中

「へぇ。では、奥さんと息子さんと娘さん、三人の家族とは五年も会ってないんですか」

「電話くらいはしてるがね」

ジョージはのしのしと歩き、文はかつかつと歩く。

道案内をしている文は話を聞きメモを取りながら、見るからに不安定な高下駄で人里への道を危うげなく先導する。

その様を後ろから見るジョージからすれば、恐々としつつ、つい感心してしまうような器用さに思えた。

ジョージ自身は緊急時以外の複数の思考や行動を何よりも苦手とし、どちらかというと不器用な部類に入る男だ。

もしもジョージが器用に見えたとしたら、大概は豪快な力押しが結果的にスマートな解決法だった場合だけである。

実際、考えなしのごり押しで主のアルフレッド共々窮地を脱したことがないわけではない。

彼の考え方は案外幻想郷向きではあったのだが、外面がいい文しか知らない現状ではそのことに気付くはずもなかった。

「はて？　でんわ、とは何ですか？　おそらく外の物だとはわかるのですが」

言ってから、立ち止まることなく首をかしげる。

傾いた頭の上に乗る帽子には、小さな白いボンボンが付いていた。

ジョージはそれを何となくむしりたい衝動に駆られながら、電話をわかりやすく説明しようと頭を回転させた。

「あー。簡単に言やぁ、ハイテクな機械でな」

「ふむ」

「遠い場所にいるAさんとBさんが会話できる、という代物だ」

「会話？」

そろり、とスイカも潰せる右手が伸びる。

「手紙は時間がかかるが、電話ってーのはほぼ時間差がない」

「ほうほぅ」

「実は私もよくわからんのだが、要するに声を瞬間移動させる不思議機械、で大体合ってる」

かなり間違っている説明に対し素直に頷く頭に向かって、手がゆっくりと伸びていく。

正確にはふわふわ揺れるボンボンに向かって。

「要するに不思議機械、と。……んー、なんか河童がそんなような物に挑戦しているとか聞いた気が……」

ネタになりますかねえ、と自問する文は、ふと髪に触れるような違和感を覚えた。

「あや？」

ピタリと動きを止めれば、背後の巨漢が彼女の頭を手で押さえていることがわかった。
正確には、帽子に付いたふわふわの飾りを。
「あ、あの。ジョージさん？」
恐る恐る振り返ってみると、射抜くような眼をした大男がいた。ジョージはその鋭い光を蒼い双眸に宿したまま、真剣な口調で委細を語った。
「お前さんの帽子のこの白い綿飾りがな、見覚えがあってな」
「はい？」
「夜から朝にかけて、情けないが私は半べそで山を駆けずり回ったわけなんだが」
「はぁ……」
「右を見れば木、左を見ても木。闇の中から聞こえるのは私の物じゃない息づかい。正直なところものすごく怖かったわけだ」
多分、山に住む野生動物や妖怪からすれば、突如草木を薙ぎ倒す勢いで爆走してきた熊男の方が恐怖を覚えたのではなかろうか。
「そんな時に見たわけだ、こいつを」
言いつつ、先程から執拗に掴んで放さない文の綿飾りを更に強く揺する。
不快にならない程度の力だったたが、文からすればただただ不可解

だった。
　しかし次のジョージの言葉で彼の言いたいことをおぼろげながらも理解した。
「こんな感じの白い綿毛の塊……毛玉の方が近いか。とにかく、突然こういう白いぼわっとした物が闇の中から飛び出たわけだ。……どう思うかお前さんわかるか？」

　毛玉。
　文は想像した。
　幻想郷ではさして珍しくもなければ大した脅威にもならない、小さなそれ。
　本来は、せいぜいその妙な表情で「いらっ☆」とさせることが限度の路傍の小石。
　——だが万が一、何一つ情報がない状態で未知の地へ放り出され、暗闇や木陰に白くぼうっと光るそれがいたら。
　闇を草木を掻き分け、見えない光を求めて駆ける最中に突然目の前にそれが現れたら。
　木々の合間から何かの視線を感じ、荒い息づかい背後を聞いて振り向いたときそれが人魂のように浮いていたら。

「…………い、意外にぞっとしませんね」

「おかげで私ゃあ毛玉恐怖症になったらしい」
　2メートルを超す巨漢が自身の指先ほどの小さな毛玉を恐れて、拗ねたようにピンと弾いた。
　文は弾かれたことで視界の隅にちらつくそれを釣られたように気にしながら、ジョージの見た目にそぐわぬ臆病さを少し好ましく思った。

出会ってからまだ一日も経っていないが、今までの様子からあまり理知的な行動をするタイプではないだろうことはわかっている。
本人も大体の解決策は力任せのみだと明言している。
だが確かに理知的ではないかもしれないが、彼自身は理性的な人物だともわかったのだ。
少なくとも正体不明の脅威に対して、勝算が見えないうちに突撃するような阿呆ではない。
理性的で臆病なジョージがその剛力を振るうのは、それが彼に取れる最善策だった場合だ。
もちろん、それしかなかったという場合もあるだろう。
だがそこも含めて、あの困惑顔で不器用に四苦八苦している姿を思い浮かべるとどうにも好ましく映るのだ。
その想いをどうやら文は知らずのうちに表へ出していたらしい。

「おいおい、何も笑うこたあないじゃないか」

完全にふてくされた声音で言われて、文は自分が笑ったらしいことに気付いた。

「あまり美味しいものじゃありませんね」

「だから言ったろうに」

結局、飲まず食わずで半日以上を過ごしたジョージの胃袋が悲鳴をあげた。
文が何か食べられる物を都合良く持っているはずもなく、ジョージは仕方なく愛用のダッフルバッグを探ることにした。
実はその中身に興味津々だった文も一緒に好き放題漁る――もと

い探ることになった。
　結果として見つかった食料は味気ないビスケットタイプの固形栄養食品が六つ、空港で買った薄荷飴の缶が一つ、同じく板チョコが三枚だった。
　何故か食料ではないメモ帳やノート、筆記具の数々、カメラ、一度見たはずの手袋、日除けのサングラス、日本製のガムテープ四つなども掘り出されていた。

（まったくの余談であるが、もしあなたが紛争地域や新興国の国境付近を旅行するなら、日本製のガムテープや筆記用具は持っていて損はない。というよりも必需品だ。何故ならその辺りの国では、日本製の生活用品は最高級の品質保証がなされたアイテムそのものだからである。実際、国境の関所はボールペンがチケット代わりになる。ガムテープともなれば彼らは大喜びし、色々な補修を始める。ドアの穴を塞ぐ程度のこともあれば、壊れた銃器を無理矢理くっつけたり、凄い時には戦車を直し始める。いくらお金があっても現地では手に入らないから、下手をすると宝石よりもガムテープが命を救う可能性が高いのだ。……閑話休題）

　とりあえず、ということでジョージがビスケット（型携帯食品）に手を伸ばしたところ、文も食べたいと好奇心を発揮させたのだ。
　この先どうなるかわからないジョージとしては携帯栄養食を無為に消費したくはないところだが、文には色々と助けられているので希望通り与えることにした。
　実は不味いことで有名な物だったのでその旨も伝えたのだが、文はお菓子気分で結構な量をかじったのだ。
　更にかなりパサパサしているので併せて水も飲むのが通例なのだが、それもない。
　結果として文は残念な味と渇きに襲われたのだった。
　今となっては遅いが、飲料水くらい買っておけば良かったとジョ

ージは後悔した。
文の二の舞にならないように、もそもそと唾液で馴染ませながら舐めるように食べているが、そうやって誤魔化すにも限界がある。
更に言えば水が無いことに変わりはないから、早急に確保しなければならない。
もっともジョージは水の必要性に関しては、人里とやらに辿り着けば何とかなるだろうと楽観視していた。
「あー。口の中がパサパサします……」
「ン。そういう時はこいつで誤魔化しちまえ」
言って、バッグにしまいかけていた缶から薄荷飴を一粒取り出し、文に手渡した。
「飴ちゃんだ。ずっと舐めてれば、まぁ口直しにはなる」
「あや、何から何まですみません。……これは薄荷ですか」
別名ミントに含まれる薄荷脳(メンソール)は、どうやらちょっと負の方向に傾むきかけていた文の感情をすっきりとさせたらしい。
元気を取り戻した彼女はまだ残っていたビスケットへ、果敢にも再挑戦を始めた。
今度は二の轍を踏まないためにジョージを見習って少しずつかじっている。
「……ふむ。こうやって食べれば意外にいけますね。味には目を瞑らないといけませんけど」
「こうしてガリガリとやるのも、一種醍醐味ではあるわなぁ。だが

「やっぱり水は欲しい」
「飴でも舐めますか」
「飴で誤魔化すにも限度はある」
「では雨でも舐めますか」
「降れば助かるんだがなぁ」
ぼやき合いながら並んでビスケットを舐める姿はかなりシュールだった。
——結局、ダッフルバッグから薄荷飴の缶を取り出し、二人して飴で渇きをしのぐことになるのだった。

気を取り直し再び歩き出してからしばらくして、その時はやってきた。
ジョージの身の回りについて質問していた文が口を閉じる。
そして足も止め彼に向き直ると、手にした手帳とペンを懐にしまった。
カツ、と乾いた高音と共に軽い風が吹いて二人の行先へむけ流れていった。

「さて」
微笑と仕切るような言葉を浮かべ翼を揺らす。
ジョージも歩みを止めると、改めて彼女を正面から見据えた。

「――こりゃあ、もう水の心配はしなくて済むってことかな？」

「ええ。長い道程お疲れ様でした」

「いやいや、おかげで本当に助かった」

言ってから視線を外し、文の向こうへと送る。

彼女も振り返ると二人で同じものを見た。

彼らの眼前には人々の賑わいが広がっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0397n/

東方巨漢紀行

2011年7月20日21時51分発行